

国際交流基金シドニー日本文化センターにおける 現職日本語教師研修

—デザイン実験アプローチに基づくインテンシブ研修のデザインと評価—

松本剛次・根岸ウッド日実子・ジョナック キャシー

〔キーワード〕 現職日本語教師研修、Intercultural Language Teaching and Learning (ILTL)、Professional Standards、プロジェクトワーク、デザイン実験アプローチ

〔要旨〕

本報告はIntercultural Language Teaching and Learning (ILTL)、Professional standards for accomplished teaching of languages and culturesなどの近年のオーストラリアの初中等教育における外国語教育の動きを踏まえて国際交流基金シドニー日本文化センター（シドニーセンター）が行っている現職日本語教師研修について報告するものである。2008年4月にシドニーセンターで行われた現職日本語教師を対象とした短期集中研修では、「ILTLの考え方を研修参加者が理解し、実際にその考え方を取り入れたレッスンプランが立てられることになる」ことを目標に研修が設計され、実施された。参加者からのエバリュエーション、課題作成物の評価、フォローアップアンケート調査の結果、この研修は一定の成果があったものと判定された。また、この研修は大島（2006）による「教師の専門性の熟達」のモデルをその研修デザインの枠組みとして採用しており、このモデルは現職日本語教師研修においても適応可能であることが確認された。

1. はじめに

本報告は、Intercultural Language Teaching and Learning（以下「ILTL」）、Professional standards for accomplished teaching of languages and cultures（以下「プロフェッショナル・スタンダード」といったオーストラリアの初中等教育における外国語教育の近年の動きを紹介し、それらを踏まえた上で、国際交流基金シドニー日本文化センター（以下「シドニーセンター」）が行っている現職日本語教師研修について、その実践例を紹介し、評価を行うものである^①。

現職日本語教師研修はシドニーセンターのみならず国際交流基金が行う日本語教育支援活動の柱の1つである。しかし柴原（2008）が評価の観点から指摘しているように、その設計、運営、評価が十分にシステマティックで戦略的であるとはまだ言えないのが現状であろう。ここでいうシステマティックとは決してある形式に従ってやればよいというような固定的なマニュ

アル型のものではなく、それぞれの現場や研修参加者の特性を織り込んで研修を組み立てることができるような、柔軟な枠組みのことを指す。システムというよりもむしろ、教師研修のモデル、と言ったほうがよいものである。本報告ではシドニーセンターでの実践例を通してその一つを提示することも試みる。

2. 背景：オーストラリアの初中等教育における外国語教育

ここではまず、オーストラリアの初中等教育における外国語学習とはどのようなものか、その理念、目的、方法を示した最初のものとして1987年発表の「Australian Language Level Guideline」(以下「ALLガイドライン」)を簡単に振り返る。そしてその考え方を受け継いで現在展開されているILTL、プロフェッショナル・スタンダード、といった動きを紹介する⁽²⁾。

2.1 Australian Language Levels Guidelines (ALLガイドライン)

「Australian Language Levels Guidelines」(以下「ALLガイドライン」)とは1987年に発表されたオーストラリア「全土」の「全部の外国語教育」の「初等から中等(ハイスクール)までの」指針、あるいは枠組みである。ここでは、言語教育とは「communication(コミュニケーション)」を中心に「sociocultural(社会文化)」「language and cultural awareness(言語と文化への気づき)」「learning how-to-learn(学習方略)」「general knowledge(一般知識)」の相互に関連した5要素の組み合わせである、という考え方が提示された(図1)。外国語学習、外国語教育とは単に外国語の習得だけを目指すものではなく、それをとおして社会や文化、さらには学習方略やより広い知識も学ぶことができるという学習観である⁽³⁾。

図1 The integration of Goals (『ALLガイドライン』より引用)



また、ALLガイドラインでは具体的な方法論として「アクティビティー」というものが重視された。アクティビティーとは「学習者が、与えられたコミュニケーション上の必要にこた

える言語的リソースを用いることを要求される「目的をもった能動的なことばの使用」(荒川・中村1998)と定義されるものである。

2.2 Intercultural Language Teaching and Learning (ILTL)

ILTLとは南オーストラリア大学言語文化教育研究センター⁽⁴⁾が中心となって開発、提唱している言語文化教育へのアプローチの総称である。この考え方は2005年に政府が発表した「National Statement for Languages Education in Australian Schools: National Plan for Languages Education in Australian Schools 2005-2008」で国の方針として採用された。またこの考え方を普及させる目的で2004-2005には「Asian Languages Professional Learning Project (ALPLP)」が、2006-2007には「Intercultural Language Teaching and Learning in Practice (ILTLP)」というプロジェクトがナショナルプロジェクトとして行われており、ILTLは現在のオーストラリアの初中等教育での外国語教育の基本的な考え方であり方法論であると言える。

ILTLの考え方では「言語と文化は密接に結びついたもの」でありそこでは文化学習、言語学習、言語学的学習は一つに統合して教えられる。また、教科の枠を超えて他教科とコラボレートする形でプロジェクトを行うことも強く薦められており、先に見たALLガイドラインでの「5要素の組み合わせ」が受け継がれていることが確認できる。外国語の習得のみを目的とするのではなく、文化に対する理解や考察も同時に行い、さらには学習方略についての学習や他教科の学習の促進、考える力自体の向上にもつなげていこうという考え方である⁽⁵⁾。

そしてここでそのための手法として提案されているのもやはりアクティビティーである。ILTLでは、ではどのようなアクティビティーを行えばよいかという部分について学習理論、認知科学研究などの最新の成果を取り入れながらさらに一步踏み込み、「Active construction (能動性の構築)」「Making Connection (関連付け)」「Social interaction (社会的なやり取り)」「Reflection (内省/熟考)」「Responsibility (責任)」の5つを授業、アクティビティーを設計する際に教師が考慮すべき原則として提示している⁽⁶⁾。また、学習者側の観点からは「Awareness (気づき)」「Comparing (比較)」「Reflection (内省/熟考)」「Interaction (相互交流)」というサイクルを繰り返し行うことが求められている⁽⁷⁾。

2.3 Professional standards for accomplished teaching of languages and cultures (プロフェッショナル・スタンダード)

プロフェッショナル・スタンダードはよりよい教育、より質の高い教育の実現のために教師、及び教育機関が意識すべきこと、心がけるべきことを、教師自身の振り返りのための「ガイド」という形で示したものである。ILTLが言語・文化教育についての理論的、技術的なアプローチ、スタンスであったのに対して、プロフェッショナル・スタンダードは倫理や責任、性格な

ども含めたより広い意味での「教師」としての終わりなき成長のための指針をまとめたものであると言える⁽⁸⁾。2005年に初中等教育機関の外国語教師が参加している団体である全豪現代語教師会 (Australian Federation of Modern Language Teachers Associations (AFMLTA)) により作成され、政府刊行物として出版された⁽⁹⁾。「Teacher Standards (教師スタンダード)」と「Program Standards (プログラムスタンダード)」の二つから構成されている全7ページの小冊子である⁽¹⁰⁾。

教師スタンダードは「education theory and practice (教育理論と実践)」「language and culture (言語と文化)」「language pedagogy (言語教授法)」「ethics and responsibility (倫理と責任)」「professional relationships (プロフェッショナルとしての関わり方)」「awareness of wider context (より広い状況への意識)」「advocacy (唱道)」「Personal characteristics (個人特性)」の8項目から構成されている。それぞれの項目で、教師が気をつけること、心がけることが記されており、またそれに対応した形で「内省のための質問 (Suggested questions for reflection)」というものも記されている。この質問に答えることで教師は自分に足りない部分はどこかを知ることができるという仕組みになっている。

2.4 Professional Standards Project-Languages (PSP)

Professional Standards Project-Languages (以下「PSP」)とは、プロフェッショナル・スタンダードを理解し、それを参照枠 (framework) として使用し、外国語教師に教師としての内省、振り返り、自己評価を促すとともに他の教師やスクールリーダーとの協働 (Collaboration) を通してリーダーシップと専門性を養い、その結果として教師の質と言語文化教育の質を高め、最終的には生徒の学習成果も高めよう、という目的で2007—2008年にかけて行われている現在進行中のナショナル・プロジェクトである。AFMLTAとともに南オーストラリア大学言語文化教育研究センターがこのプロジェクトの開発と実施を担当していることもあり、前述のILTLとのつながりは深い。教師研修 (Professional Development) のプロジェクトであるという点で本報告のテーマとも重なるため、以下、現在このプロジェクトのもとでどのようなことが行われているのか、少し詳しく説明する⁽¹¹⁾。

このプロジェクトでは、オーストラリアの全州、全地域においてStream A、Stream Bという2段階の研修プログラムが実施される⁽¹²⁾。Stream Aでは、プロフェッショナル・スタンダードを知ることと、Professional Learning (教師としての学び) においてそれをどう使うか、というテーマでセッションが行われた。筆者はニューサウスウェールズ (以下「NSW」) 州におけるこの研修ワークショップに参加する機会を得たが、ここで強く提案、推奨されていたのはクラスルームリサーチの実施であった。プロフェッショナル・スタンダードを教師自身における授業実践の調査、評価 (= クラスルームリサーチ) の枠組み (framework) として使用し、

それを各教師が行うことで、教師としての専門性を高めていこう、という考えからである。

NSW州でのワークショップでは2つのクラスルームリサーチの例が紹介された。発表された2例はどちらもある程度の期間にわたるプロジェクトワークを調査したものであった。単に担当教師の視点のみから調査分析したものではなく、同僚である他の教師からも評価を得たり、またLearning journalやポートフォリオの形で学習者である生徒からのデータも取ったり、さらに保護者にもアンケートを行い子供の学習や成果について報告してもらうなど多面的な評価、分析が行われているのがその特徴であった⁽¹³⁾。

Stream A修了後さらなる研修を希望する者はStream Bへと進む。そこでは特に「教育理論と実践」、「言語と文化」、「言語教授法」を中心にさらなる研修を受け、そしてそこで学んだことを踏まえて自分の現場でクラスルームリサーチを行い、報告することが求められている。

次の表1はPSP、StreamA、Bで行われるセッションモジュールの単元名を並べたものである。これを見ると「intercultural」という言葉はもとより「awareness」「interaction」「connections」などILTLのキーコンセプトである用語が多く使用されていることが確認できる。これはこのPSPはそれ以前のものも含めた他のナショナル・プロジェクトと協働 (collaborate) するものとして位置づけられているからである。

表1 PSPでのワークショップモジュール (訳は筆者による)

Stream	Module	Titles
A	Module 1	Using the <i>Standards</i> in Professional Learning (教師としての成長における「スタンダード」の使用)
	Module 2	Getting to know the <i>Standards</i> («スタンダード」を知る)
B	Module 3	Learning, learners and their life worlds (学習者とその生活世界を知る)
	Module 4	Identifying language specific needs (言語特定のニーズを明らかにする)
	Module 5	Resources for language learning (言語学習のためのリソース)
	Module 6	Language learning and language awareness (言語学習と言語への気づき)
	Module 7	Teacher talk and classroom interaction (ティーチャートークとクラスルームインターアクション)
	Module 8	Assessing language learning (言語学習の評価)
	Module 9	Developing relationships and wider connections (関係作りとより広いつながり作り)
	Module 10	Understanding the interrelationship of the intracultural with the intercultural («文化間」と「文化内」の関係を理解する)

3. 報告：シドニーセンターにおける日本語教師研修

3.1 方法

このようなオーストラリアにおける外国語教育の動きを踏まえ、それを最大限に取り入れ反映させた形で行われているのがシドニーセンターにおける日本語教師研修である。ここでは2008年4月に行われた4日間の現職日本語教師研修を取り上げ、それがどのようにしてデザインされ、それを行った結果、どのような成果が得られたのかについて報告する。

なお、研修の評価については、柴原（2008）による考察を踏まえて、「カークパトリックの4段階評価」（Kirkpatrick 2006）に対応させる形で以下の表2のような形で調査を行った。

表2 カークパトリックの4段階評価と本研修における評価

カークパトリックの4段階評価		本研修における評価	
レベル1	反応	研修参加者の満足度	エバリュエーション（評価票）
レベル2	学習	研修で学んだ知識・技能などの理解度	エバリュエーション（評価票） プロジェクトワーク作成物の分析
レベル3	行動変容	研修後の職務上の行動の変化	フォローアップアンケート
レベル4	結果	研修後の成果の変化	フォローアップアンケート

3.2 研修、及び参加者について

この研修は2008年4月14日から17日にかけてシドニーセンターで行われたインテンシブ研修と呼ばれる短期集中型の研修である。インテンシブ研修とは、シドニーセンターで年2回のペースで行われているオーストラリア、ニュージーランドの現職日本語教師を対象とした4日間に及ぶ集中教師研修の名称であり、日本語と日本語教授能力の向上がその目的である。当該回はシニア・セカンダリー（10—12年生：日本の高校生に相当）で日本語を教えている教師を対象として行われ、将来の各地域におけるリーダー候補の発掘というのもその目的に加えられていた。この目的、及び条件のもと、応募に対して申し込みのあったものの中から15名（オーストラリアから10名、ニュージーランドから5名⁽⁴⁾）が、研修参加者として選ばれた。

3.3 研修の目標（ゴール）と設計（デザイン）

3.3.1 研修の目標（ゴール）

この研修は現職日本語教師を対象とした教師の専門性を高めるための教師研修である。教師の専門性については、これまで大きく2つに分類されてきた（Schulman 1987など）。一つは教える教科についての専門的知識である教科内容の知識（subject matter knowledge）と、もう一つはそれをどう教えるかという教えるための知識である教授学的知識（pedagogical

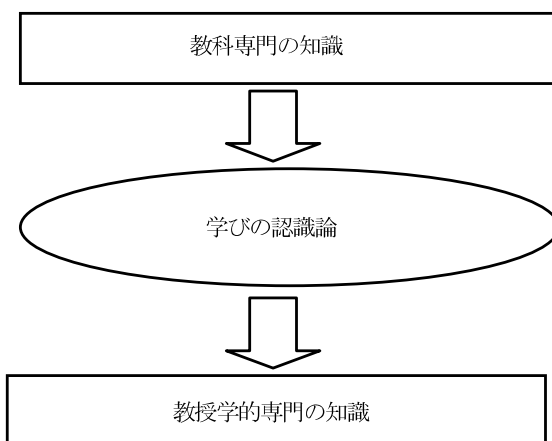
knowledge) である。本研修では時間も限られており、また既に参加者の日本語力がある程度あるという理由から、特に後者の「教授学的専門の知識」（本研修では「日本語の教え方の能力、知識」）に力を入れることとした。教授学的専門の知識としては、具体的な教授法ではないが、現在のオーストラリア・ニュージーランドにおける学校教育での外国語教育で強く唱えられているものは、PSPでも取り入れられているようにILTLの方法論であり、考え方である。そこで本研修では「ILTLの考え方を研修参加者が理解し、実際にその考え方を取り入れたレッスンプランが立てられるようになる」、ということ、つまりILTLの考え方が「分かり」、それを「使える」ようになる、という点を本研修の目標、ゴールとして設定した。

このように研修のメインの目標はILTLという形での教授学的専門の知識の向上だが、しかし、だからと言って日本語力の向上（＝教科内容の知識の向上）を目的とはしないというわけではない。日本語力についてはこの研修自体をすべて日本語で進めることにより、日本語での意味のあるやり取りを通してそれを高めていくというイマージョンプログラムの考え方と方法論を取り入れ、特に運用力、コミュニケーション能力の面での向上を目指した。

3.3.2 研修の設計（デザイン）

では、どのようにすればこの目標を実現することができるだろうか。本研修をデザインするに当たりその枠組みとして使用したのは次の大島（2006）による教師の熟達性の向上のモデルである。大島（2006）は、教師に必要な専門性としてこれまでに挙げられてきた「教科専門の知識」、「教授学的専門の知識」の2つに加え、今の時代は、人が学ぶということをどのように捉えているかである「学びの認識論」というものも加えるべきだと主張している。現在では学びの認識が「基礎的な知識から理解へと、教師の知っていることを伝達すること」が目的とされた知識伝達型のモデルから構成主義に基づいた「学習者自らが理解を深めていく活動の支援」

図2：教師の専門性の熟達（大島2006：154より）



としての教授という考え方に移行している、というのがその理由である。そして、教師の専門性の熟達において、教科専門の知識が教授学的専門の知識へと変換されていく際に、この学びの認識論がその両者を媒介する役目を果たしているとし、その関係を前ページの図2のように示している。

このモデルを本研修に当てはめた場合、「学びの認識論」に相当するのはILTLの考え方である⁽¹⁵⁾。そしてそうなると次に問題になるのはどうすればその「学びの認識論」を学ぶことができるのか、ということであるが、本研修では、「学びの認識論について学ぶにはその学びの認識論に基づいた授業を実際に体験してみることが有効である」という仮説を立て、その仮説を取り入れて研修をデザインし、その成果に対する評価を行うことで、実践を通じた仮説の検証を行うこととした。具体的には、まずはILTLの方法と考え方を教師である研修参加者自身が日本語の授業 (=教科専門の知識の授業) として体験してみる。そしてその体験を踏まえた上

表3 インテンシブ研修の時間割

	4/14 (月)	4/15 (火)	4/16 (水)	4/17 (木)
9:15	9:15-9:45 オリエンテーション	9:30-12:00 ⑤テクノロジーセッション：ネット上のリソースを探そう/ネットでコミュニケーションしよう	9:15-11:15 ⑨リッピングとスピーキングをのぼそう！	9:15-9:30 発表準備
	9:45-10:15 図書館オリエン			モーニングティー
	10:15-11:00 モーニングティー		11:00-11:30 ⑮まとめ	
	11:00-12:30 ①ILTLについて考えよう！「Art Speaks Japanese」	12:00-1:45 移動、昼食	11:45-12:45 ⑩プロジェクトワークをしよう(準備)	11:30-12:00 閉講式
12:45	12:30-2:00 美術館訪問/昼食		12:45-1:45 昼食	12:00-1:00 昼食会
1:45	2:00-3:25 ②ILTLの授業を体験しよう！「エリンが挑戦！日本語できます。」	1:45-3:45 ⑥文法と作文を伸ばそう！	1:45-3:15 ⑪プロジェクトワークをしよう(インタビュー)	
	アフタヌーンティー		3:15-3:30 休憩	
	3:35-5:00 ③現代日本社会を考えよう！「若者文化」	4:00-5:00 ⑦アイデアをシェアしよう！教室活動を考えよう！	3:30-5:00 ⑫プロジェクトワークをしよう(発表準備)	
5:00				
5:30	5:30 ④歓迎夕食会	5:30-6:30 ⑧書道	5:30-6:30 ⑬カラオケ	

表4 各セッションの内容⁽¹⁶⁾

セッション	タイトル	内 容
①	ILTLについて考えよう！	ILTLについて解説し、ILTLの考え方を取り入れて作られた教材「Art Speaks Japanese」を紹介し、その後「Art Speaks Japanese」の使い方についてILTLの観点からみんなで考えます。ランチの時間には実際に美術館を訪問し、作品を見てみます。
②	ILTLの授業を体験しよう！	Japan FoundationのDVD教材「Erin's challenge! I can speak Japanese.」を使って、日本語の模擬授業をします。またこの教材の使い方と高校生の日常生活という日本の文化を日本語の授業でどう取り入れるかについて、みんなで考えます。
③	現代日本事情を考えよう！	2007年の日本の流行・ニュースを通して、日本語をブラッシュアップしながら、日本社会、特に若者について考えます。また、3日目からのプロジェクトワークのトピックを考えます。
④	Welcome dinner	日本レストランで日本料理を食べながら参加者同士の親交を深めます。
⑤	ネット上のリソースを探そう！ ネット上でコミュニケーションしよう！	ネット上にある役に立つホームページ、リソースを紹介します。Social constructionismの考え方を取り入れて開発されたコンテンツ管理システムであるMoodleについて、実際にそれを動かしながら紹介します。またThe Japan Forumが開発した高校生のためのSNSサイト「つながる」を紹介し、その使い方について考えます。
⑥	文法と作文を伸ばそう！	Seniorレベルの文法についてもう1度確認します。また、ピア・レスポンスを通して、自分の書いた作文をブラッシュアップし、文法の教え方、作文の教え方についても考えます。
⑦	アイデアをシェアしよう！ 教室活動を考えよう！	宿題として提出した活動案を紹介してもらいます。また、これまでに学んだILTLの考え方を踏まえて、それをどのように改善するとより効果的か、みんなで考えます。
⑧	書道	プロの書道家を講師に招き、書道を体験します。
⑨	スピーキングとリスニングをのばそう！	NSW教育省作成のスピーキングとリスニングの能力をのばすためのCD-ROM教材を紹介します。そして、その教材の使い方についてみんなで話し合います。
⑩⑪⑫⑬⑭	プロジェクトワークをしよう！	自分で選んだテーマで日本人にインタビュー／ディスカッションをして、そのテーマをどうILTLとして自分の授業に取り入れるか、考えて発表してもらいます。
⑬	カラオケ	日本人のエンターテイメントである「カラオケ」を体験します。
⑮	まとめ	この研修を振り返り、ここで何を学んだかを考えます。またこれからの教師間ネットワーキングについても考えます。

で今度はそこで学んだことを使って、自分の授業にILTL的な観点と手法を取り入れ、それを自身の教授学的専門の知識の表れとして組み立ててみる、という流れである。そのようにして設計されたのが表3、表4に示すセッション群である。

表3、表4から分かるように、この研修は、前半では、ILTLの考え方を取り入れた日本語、教材・教室活動作成、テクノロジーなどの授業を体験し、後半では主にプロジェクトワークという形でそこで体験したことを自分なりに再構築してみる、という流れになっている。体験を通して学んだことをプロジェクトワークという体験を通して再構成するというのが本研修の狙いであり目的である。プロジェクトワークとは企画から発表まで参加者が自主的、主体的に行うという形態の活動であるが、ここでは具体的には受講生が自分で現代日本事情に関するテーマを設定し、それについてシドニー在住歴の比較的浅い日本人にインタビューを行い、そのインタビューの結果を生徒向きの読み物教材という形でまとめ、それを使ってどのような授業を行うか、教案や教室活動案を考え、発表する、という活動が行われた⁽¹⁷⁾。

3.4 結果・評価

3.4.1 エバリュエーション評価

セッション間での時間の調整などはあったものの、順調に研修は行われ、運営側、教師側の手ごたえとしても十分に満足のいくものであった。研修参加者には最終日にエバリュエーションシートに記入してもらったが、そのほとんどが評価の高いコメントであった。特に「このセミナーはあなたの教え方や学習についての考えを変えましたか？そうである場合、どのように変わりましたか」という問いにはほぼ全員が「変化」や変化とはいえないまでも何らかの「気づき」を挙げ、それについて言及している。この質問項目への回答を表で示したものが表5である。

これを見るとその内容もILTLに直接言及しているのはもとより、「現実の (Authentic)」「比較 (Comparing)」「ディスカッション」などILTLのキーワードとも言えるものについても触れているものが多いことが分かる。また、講師側、運営側からのインプットだけではなく、研修参加者相互のやりとり (インターアクション) から学ぶことが多かったとコメントしているものもあった。「ILTLの考え方を研修参加者が理解し、実際にその考え方を取り入れたレッスンプランが立てられることになる」ということが本研修の目的であったが、少なくとも「ILTLの考え方を理解し」という部分については参加者の自己評価ではあるが、成果は認められたとあってよいであろう。

3.4.2 作成物の評価

次に、研修で学んだことの理解度について、実際に研修参加者がどのような活動案を作成したのかという点について、プロジェクトワークで作成した「クラス活動案」を資料に分析を行っ

表5 エバリュエーションシートに対する回答の要約

質問	「このセミナーはあなたの教え方や学習についての考えを変えましたか？そうである場合、どのように変わりましたか？」
研修生1	より「現実の (Authentic)」読み物に学生をチャレンジさせてもいいと思うようになった。講師たちの提示の手法は刺激的でやる気を起こさせるものであり、自分の授業でも取り入れたい。
研修生2	より「楽しく」「リアルに」「モチベーショナル」に自分の授業をしたいと思った。教え方にはまだまだ可能性があると思った。
研修生3	ITとの協力をより取り入れる価値があると気付いた。学生たちの参加を引き出すことができる。
研修生4	自分のILTLに関する知識を整理統合することができた。昨年ILTLのプロジェクトに参加したが、そこでは5原則、4つのサイクルなどはあまりフォーカスされていなかった。
研修生5	考え方が大きく変わったというわけではないが、特にILTLの考え方など、自分の授業に取り入れることのできる多くの実践的なアイデアを得ることができた。
研修生6	すでにこのような考え方にのっとっていたのでそう大きな変化はない。しかし、既知っていることについて確認、アップデートすることはできた。
研修生7	ITをより自分のクラスに取り入れる必要があると感じた。また、多くのすばらしい教師と意見を交換し合えたのは非常に良い経験であった。
研修生8	ILTL自体は既知に知っていたが、その考えをすっきり理解することができ、自分のクラス活動についてもより意識的になった。語彙や文法の活動に忙しいが、ディスカッションや「比較」の活動も必要である。
研修生9	自分の授業へのILTLの取り入れにより意識的になった。ある程度はすでにそうしていたとは思いますが、より具体的にそれを知ることができた。
研修生10	教え方のヒント、活動、ウェブサイト、教授法など、教え方を改善するより多くのアイデアを得られた。
研修生11	他の参加者から多くの刺激と役に立つアイデアを得られた。文法や語彙と同じように、「文化」について議論することも教えることのエッセンスであることに気づいた。
研修生12	このセミナーで私の理解を深めることができた。理論と実践のつながりは素晴らしいものであった。昨年ILTLのプロジェクトに参加したがそのあとでこの研修を受けたことは理解をより深めるのに役に立つものであった。
研修生13	クラスで取り入れたい多くのアイデアを得ることができた。
研修生14	学生を巻き込むことのできる新しいテクノロジーについて学ぶことができた。
研修生15	既にできる限りILTLを自分のクラスに組み込むようにしていたのでそう大きな変化はない。しかし、実践的なタスク、セッションに参加することにより自分の考えややり方を再確認することができた。

た。具体的にはILTLの立場で授業を組み立てる際に必要とされる「noticing (気づき)」「comparing (比較)」「reflecting (内省/熟考)」「interacting (相互交流)」のサイクルがあるかどうか、ある場合それらはどのような形で行われているかという点に注目し、評価、分析を行った。その結果が、次頁の表6である。

表6 プロジェクトワーク作成物の分析結果

研修生	ILTLの4サイクル	評 価	研修生	ILTLの4サイクル	評 価
1	noticing (気づき)	△	9	noticing (気づき)	○
	comparing (比較)	○		comparing (比較)	○
	reflecting (内省/熟考)	○		reflecting (内省/熟考)	○
	interacting (相互交流)	○		interacting (相互交流)	×
2	noticing (気づき)	○	10	noticing (気づき)	○
	comparing (比較)	○		comparing (比較)	△
	reflecting (内省/熟考)	○		reflecting (内省/熟考)	△
	interacting (相互交流)	○		interacting (相互交流)	△
3	noticing (気づき)	提出せず	11	noticing (気づき)	△
	comparing (比較)			○	
	reflecting (内省/熟考)			○	
	interacting (相互交流)			○	
4	noticing (気づき)	○	12	noticing (気づき)	○
	comparing (比較)	○		comparing (比較)	○
	reflecting (内省/熟考)	○		reflecting (内省/熟考)	△
	interacting (相互交流)	○		interacting (相互交流)	△
5	noticing (気づき)	△	13	noticing (気づき)	△
	comparing (比較)	○		comparing (比較)	○
	reflecting (内省/熟考)	△		reflecting (内省/熟考)	○
	interacting (相互交流)	○		interacting (相互交流)	×
6	noticing (気づき)	提出せず	14	noticing (気づき)	提出せず
	comparing (比較)				
	reflecting (内省/熟考)				
	interacting (相互交流)				
7	noticing (気づき)	○	15	noticing (気づき)	△
	comparing (比較)	△		comparing (比較)	○
	reflecting (内省/熟考)	○		reflecting (内省/熟考)	○
	interacting (相互交流)	△		interacting (相互交流)	×
8	noticing (気づき)	△	○ かなりある △ 少しある × ほとんどない		
	comparing (比較)	△			
	reflecting (内省/熟考)	○			
	interacting (相互交流)	△			

これを見ると、課題を提出した研修参加者についてはほぼ全員が何らかの形で学習の4サイクルを取り入れた活動案を作成できていたことが確認できる。Interactingに×がついているものが3名いるが、これは作ったものが読み物教材ということから個人向けの活動を設定したためであった。研修を受ける前から既にこのような教室活動案を考えることが出来ていた可能性は否定できないため、本研修の結果このようなことができるようになったとは結論付けられないものの、この結果から「ILTLの考え方を取り入れたレッスンプランが立てられるようになる」という本研修の目標には、ほぼ全員が研修終了時において到達できたと言うことはできる。

では、具体的には研修参加者はどのような活動案を作成したのであろうか。ここでは紙幅の都合上1事例を示すに留めるが、この研修参加者（研修生2）は今回インタビューした相手がシドニー在住の日本人であったことから「海外の経験はこの人たちのキャリアにどう影響するのか」、という点に興味を持ちインタビューを行い、それをパワーポイントスライドの形で生徒向けの読み物としてまとめた。そしてそれを用いて行うクラス活動として図3のような活動を設定した⁽¹⁸⁾。

ここでは、まず、プレタスクを行うことで生徒の意識をフォーカスさせ、その結果「気づき」の生じる可能性を高めている。また、日本人同士の異なる意見や、日本人とオーストラリア人の考え方を「比較」させ、さらにそれを自分の考えとも比較させて、生徒により深く考えること（reflection）を促している。そして活動としてもグループディスカッション、ペアディスカッションはもとより、読み物の中の日本人とのやりとり、作文のタスクでは想像上の人物とのやり取りなど、さまざまな形で人や物とのインターアクションが行われている。言語学習という観点からはここでどのような言語形式にフォーカスさせるかが明確に示されていないために、不十分なところもあるが、言語と文化の学習を統合的に行い、さらにその活動を通して深い考察をさせている点など、この活動案は十分にILTLの考え方を取り入れたものであると評価できる。

3.4.3 フォローアップアンケート

研修終了後、研修参加者の行動は実際に変化したのか、研修の成果として、研修参加者の授業は改善されたのかを確認するために、研修が終了した後で、一学期が経過した約4ヶ月後に、フォローアップアンケートを行った。ここでは、①研修は役に立ったか、②研修終了後、授業や日本語の教え方に関する意識は変わったか、③研修終了後の学期において何か新しい試みは行ったか、について、①②については4段階の評定評価と自由記述で、③については「はい」と「いいえ」を選択した後に、「はい」の場合はどのようなことを行ったかを記述する、という形で質問が行われた。アンケートは15名中6名から回収できた。次の表7はその結果である。

この結果をみると研修生10を除いては、自己評価ではあるがなんらかの変化を認めており、カークパトリックの4段階評価で言うところの「行動変容」が認められた⁽¹⁹⁾。回答を寄せた者

図3：研修生2作成のクラス活動案

<p>プレタスク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人がオーストラリアを訪れる／滞在する理由についてブレインストーミングの議論をする。 ・自分が日本に行く場合の理由、希望滞在期間、などについて考える。 <p>タスク1：グループディスカッション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スライド1～4の中から一つを選んで読み、年齢、性別などそのコメントを行った人物がどのような人物なのかをグループで議論する。 ・その人物にとって「大切なこと」は何かを考える。またその人物がそのような考えを持つに至った文化的な影響について考える。 <p>タスク2：作文</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この読み物から得た情報をもとに、次のいずれかを作成する。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 仕事／海外の経験についてのレポート 2. オーストラリアの生徒と日本の生徒との間での将来についてのダイアログ会話 3. メルボルン在住の若い日本人が書いた日記 <p>タスク3：ペアディスカッション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この読み物から得た情報をもとに、「自分の将来の計画」についてペアで話し合う。
--

表7 フォローアップアンケート結果

	① 研修は役に立ったか。	② 研修後意識は変わったか。	③ 研修後、新しい試みを行ったか。
研修生2	4. とても役に立った	4. とても変わった	はい
研修生3	4. とても役に立った	3. 少し変わった	はい
研修生10	3. 役に立った	2. いいえ、変わらなかった	いいえ
研修生11	3. 役に立った	3. 少し変わった	はい
研修生13	4. とても役に立った	4. とても変わった	はい
研修生14	3. 役に立った	4. とても変わった	はい

に限ってではあるが、研修の成果は持続できているといえるであろう。なお、研修生10が研修後も意識は変わらず、新しい試みを行っていないのは自由記述のコメントによると「研修前から常に面白くチャレンジングな教材開発、教室活動作りに取り組んでいた」から、とのことであった。

しかし、ここで改めて表6を見ると、研修生10の作成物に対する評価には三角が多く、他の研修生と比べてもそう評価の高いものではない。自己評価と第三者の評価とにはずれがあるようである。また、アンケートの回収率の低さはそもそも意識と行動の変化が十分ではなかったからではないか、とも考えられる。この結果だけから何らかの結論を導き出すのは早急ではあるが、今後は、本人が自分自身を客観的に見られる形で意識と行動の変化を示し、その変化が継続できるような仕掛けも含んで、研修をデザインする必要があるのではないかと考えられた。

4. まとめと考察、および今後の課題

以上、オーストラリアにおける近年の外国語教育の動きを踏まえ、それを身につけることのできるような研修をデザインし、その成果の評価を行った。結論としては行動の変容とその継続という点ではまだ課題があるものの、「ILTLの考え方を研修参加者が理解し、実際にその考え方を取り入れたレッスンプランが立てられるようになる」という目標が大筋では達成でき、その点で本研修は成功であったと言える。この結果は運営側としては満足のいくものであるが、しかし、個別の結果に満足しているだけでは今後の進展は少ない。個々の研修を成功させるのはもちろんであるが、より良い研修を継続的に提供していくには、それらの個別の経験を通して、どういう教師研修をデザインするのがよいのかといった点についても考えていく必要があるからである。

本研修はそのデザインにあたり「モデル」を立てていた。このようにモデルに基づき実践をデザインし、その成果からモデルを検証するとともに、モデルからデザインを導くための「デザイン原則」を見出していこう、というのは認知科学研究、特に学習科学の分野で「デザイン実験アプローチ」と呼ばれている手法である⁽²⁰⁾。今回の結果のみからこのモデルの妥当性とそこから引き出された研修デザインの有効性について結論を下すことはまだまだできないものの、今回、研修がうまく行ったという事実は、そのデータの一つに成り得るであろう。まだまだデザイン原則と言える段階のものではないが、本報告が提示した教師研修のデザインの枠組みは、ILTLという「学びの認識論」を中心として、まずはそれを教師である研修参加者自身が日本語の授業として、つまりは教科専門の知識の授業として体験し、そしてその体験を踏まえた上でそこで学んだことを使って自身の教授学的専門の知識の表れとして教材や教案を作ってみる、というものであった。このように教師研修において研修参加者である教師の「学びの認識」に揺さぶりをかけようというアプローチは、モデル化、デザイン化こそまだされていないものの、実は近年、世界各国、各地域で同時発生的に生じているアプローチであり、非常に興味深い。例えばこの国際交流基金日本語教育紀要においてもこれまで阿部・八田（2005）、藤長・古川・エフィ（2006）、阿部・坪山（2008）、八田（2008）など各国での教師研修についての報告があるが、その多くが何らかの形で学習者（研修参加者）としての経験を通して現職日本語教師の学習観に揺さぶりをかけているものである。これらの多くの実践を個別の実践で終わらせずお互いに連携し、よりよい教師研修を安定して提供していくためにも、ある共通したモデル、デザインのもとで論じることは有意義なことであろう。研究としてはまだまだ不十分なのであるが、本報告がその第一歩となれば幸いである。

〔注〕

- (1) 本報告は、ジョナック・根岸・松本 (2008) の続編と言えるものでもある。そこで今後の課題としてセンターが行うプロジェクトに対する評価の必要性を指摘したが、本報告はその評価についての報告書でもある。
- (2) 1980年代以降の外国語教育政策の展開についてはジョナック・根岸・松本 (2008) に詳しい。
- (3) 西原 (2008) が指摘しているように、外国語のスキルそのものだけではなく世界的に視野が広がること、相対的なものの見方ができるようになること、などはオーストラリアに限らず、初中等教育での外国語教育の目的の中心である。しかし、1987年の時点でそれを明確に、しかも体系化して示したという点でこのALLガイドラインは世界でも先駆けたものであったと言える。
- (4) Angela Scarino, Tony Liddicoatなどがその中心人物である。Angela ScarinoはALLガイドライン作成の中心メンバーでもありその意味でもILTLはALLガイドライン以来の流れを受け継ぐものであると言える。
- (5) ILTLでは学習者が自文化でもなく学習文化でもない「第三の場所 (the third place)」に到達することも目標にしている。第三の場所についての議論は佐々木・細川・砂川・川上・門倉・牲川編 (2007) にもある。
- (6) ILTLの基本的な考え方とその方法論及び事例についてもジョナック・根岸・松本 (2008) を参照のこと。
- (7) ILTLでは「言語と文化は密接に結びついたもの」と捉えられており、このサイクルは言語学習のみでなく文化学習にも当てはまる。このサイクルは (5) で述べた「第三の場所」へと到達するためのサイクルでもある。
- (8) このようなプロフェッショナル・スタンダードの開発は、アメリカ (National Board for Professional Teaching Standards)、イギリス (The Framework of Professional Standards for Teachers in England)、ニュージーランド (Professional Standards: Criteria for Quality Teaching) などでも行われている。
- (9) プロフェッショナル・スタンダードは次のウェブサイトよりダウンロードできる (2008年12月現在) http://www.decs.sa.gov.au/curric/files/links/prof_standards.pdf
- (10) このプロフェッショナル・スタンダード作りの第2弾プロジェクトとして2007年から「言語別注解 (Language specific annotation)」というものも作成されており、2008年5月現在、7言語のそれが完成している。日本語もその1つであり、そこには特に教師スタンダードの「言語と文化」の章を中心に、日本語教師として押さえておきたい項目が提示されている。言語別注解は次のPSPのウェブサイトからダウンロードできる (2008年12月現在)。<http://www.pspl.unisa.edu.au/standards.html>
- (11) PSPに関する資料はすべて上記のPSPのウェブサイトからダウンロードできる。
- (12) 総勢約400名の外国語教師がこの研修に参加することになっている。
- (13) 本報告もまた、教師研修という授業実践を舞台としたクラスルームリサーチであると言える。教師としての成長にクラスルームリサーチが有効であるのと同様に、教師研修者としての成長にもクラスルームリサーチは有効であろう。本報告は、その意味で、教師研修者としての筆者らの内省、振り返りの記録であるとも言える。
- (14) ニュージーランドではILTLは国の教育政策の一環として推進されているわけではないが、2006年のNZALT (ニュージーランド外国語教師会) の全国大会のテーマになるなど、ニュージーランドでも関心は高い。
- (15) 実際ILTLの提唱者たちはILTLはいわゆる教授法ではなく、教え方、学び方に対するスタンスである、という言い方をしている。またILTLはいわゆる構成主義的な考え方を強く反映しているものでもある。
- (16) セッション①で使用した「Art Speaks Japanese」についてはジョナック・根岸・松本 (2008) を参照のこと。
- (17) このようなプロジェクトワークは実際のインターアクションを通して学ぶ、という点で、ILTLでも推奨されている活動の1つであり、また先にみたようにPSPで教師としての成長のための手法の1つとして提

国際交流基金シドニー日本文化センターにおける現職日本語教師研修

案されているクラスルームリサーチもこのプロジェクトワークを舞台に行われることが多い。シドニーセンターが行う教師研修はオーストラリアにおける近年の外国語教育の動向を踏まえた上でそれに合わせて、それを補完する形で行われるべきものである。本研修はそのような近年の動きとも十分に歩調を合わせて設計されている。

- ⁽¹⁸⁾ 次節で述べるフォローアップアンケートの結果をみると研修生2は研修後の変化を自覚しており、このような教案が作成できるようになったのは研修の成果である可能性が高いと考えられる。
- ⁽¹⁹⁾ 具体的には、「研修後、新しい試みを行ったか。」という問いに対して、研修中にプロジェクトワークで作った教材を実際に使用して実際にプロジェクトワークを行った、研修で講師や他の教師が紹介した活動を取り入れた、テクノロジーセッションで習った技術を使って教材を作成した、などの回答があり、研修で学んだことが比較的直接的に行動に取り入れられていることが確認できた。
- ⁽²⁰⁾ デザイン実験アプローチについては三宅・白水（2003）などに詳しい。

〔参考文献〕

- 阿部洋子・八田直美（2005）「海外日本語教師上級研修が目指すもの—学びの場を構築・共有する—」『国際交流基金日本語教育紀要』第1号 国際交流基金、233-240
- 阿部洋子・坪山由美子（2008）「現職日本語教師に対する教授法授業のカリキュラムデザイン」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号 国際交流基金、131-142
- 荒川洋平・中村雅子（1998）「オーストラリアにおける日本語教育～Australian Language Levels (ALL) Guidelinesに見る理念と特徴～」、国際交流基金日本語国際センター「調査研究部会 第3回海外日本語教育研究会 オーストラリア」
〈http://www.jpfg.go.jp/j/urawa/world/chek/wld_03_03.html〉 2008年12月5日参照
- 大島純（2006）「授業研究と教師教育」大島純・野島久雄・波多野諠余夫（2006）『新訂 教授・学習過程論 学習科学の展開』放送大学教育振興会、151-166
- 佐々木倫子・細川英雄・砂川裕一・川上郁雄・門倉正美・牲川波都季編（2007）『変貌する言語教育 多言語・多文化社会のリテラシーズとは何か』くろしお出版
- 柴原智代（2008）「日本語国際センターの研修評価システムに関する提案」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号 国際交流基金、87-102
- ジョナック キャシー・根岸ウッド日実子・松本剛次（2008）「オーストラリアの初中等教育における外国語教育の現在と国際交流基金シドニー日本文化センターの日本語教育支援—Intercultural Language Teaching and Learningの考え方を中心に—」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号 国際交流基金、115-130
- 西原鈴子（2008）「子どもが日本語を学習するとき—2006年海外日本語教育機関調査から—」『日本語教育通信』第60号 国際交流基金、1-2
- 八田直美（2008）「国際交流基金バンコク日本文化センターにおけるタイ人日本語教師のための「水曜研修」—ノンネイティブ教師研修における学び合いと研修成果の教育現場での実践—」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号 国際交流基金、143-156
- 藤長かおる・古川嘉子・エフィ ルシアナ（2006）「インドネシアの高校日本語教師の成長を支援する教師研修プログラム」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号 国際交流基金、81-96
- 三宅なほみ・白水始（2003）「デザイン研究」『学習科学とテクノロジー』放送大学教育振興会、67-80
- Australian Federation of Modern Language Teachers Associations. (2005). *Professional standards for accomplished teaching of languages and cultures*. Commonwealth of Australia.

Kirkpatrick, D.L. and Kirkpatrick, J.D. (2006). *Evaluating Training Programs: The four levels*. Berett-Koehler.

Shulman, L.S. (1987). Knowledge and teaching: Foundations of the new reform. *Harvard Educational Review*, 57 (1). 1-122.